ブハラ（ウズベキスタン）由来のヘブル語聖書トーラー写本及びトーラー・ケース一式

杉本（すぎもと）　智俊（ともとし）
（文学部教授）

1　書物の宗教

ユダヤ教は,「書物の宗教」として知られている。シナゴグの礼拝では，トーラーの巻物を聖櫃から取り出し，練り歩きながら示し，会衆がそれを朗読することが中心となっている。本資料は，そのようなユダヤ教信仰の中核に位置するトーラーの写本とその付属品の典型例である。

トーラーは，ヘブル語（旧約）聖書の最初の五つの書のことで，モーセがシナイ山で神から受けた啓示を記録したものとされる。イスラエル人は，モーセを通して神と契約を結び,「神の律法」であるトーラーを守ることで神からの祝福が約束されると信じている。ヘブル語聖書には，この他「預言者」(ネビイーム）と「諸書」(ケトゥビーム）があり，合わせて「タナハ」と呼ばれるが，預言者と諸書はトーラーにもとづく後の時代の啓示なので，トーラーこそがすべての基礎とされている。

ユダヤ教は，典型的な啓示宗教であって，神が自分を開示することで，はじめて人間は神を知ることができると考えている。また，神は世界の一切を造り，動かしている存在なので，人間は自分の考えではなく，神の理（ことわり）（秩序）と調和して生きる時に祝福されると考えている。そういう意味では，人間の側から神や真理に至るため，研究や修行をしたり，悟りを求めるアプローチとは，まったく異なる思想体系だと言えるであろう。

2　徹底した聖書研究の発達

このようなユダヤ教徒にとって，神の律法に従って生きることは極めて重要なことである。そのため，徹底した聖書研究が発達し，それをもとにした詳細な戒律の体系が形成された。人が行うべき積極的な戒めは 248, 行ってはならない否定的な戒めは 365, 合わせて 613 の守るべき戒めが律法にはあるとされ，その一つ一つについて，さまざまな状況に適合させる戒律が存在している。

このような律法の解釈は，ミシュナ，タルムードという何十巻にも及ぶ書物にまとめられているが，そうした聖書研究は，前 2 世紀の死海文書の時代にすでに始まっていたことが知られている。こうした伝統は現在でも継続しており，常に新しい解釈が生まれている。たとえば,「安息日を聖とせよ」という戒めは聖書自体に存在しているが，飛行機に乗って日付変更線を越えた場合どうなるのかは記されていない。そのような新しい状況に合わせて，常に新しい解釈を与え，戒律を生み出し，誤りなく神の律法を守ることが現在のユダヤ教の基本姿勢となっている。

キリスト教も，聖書を神の言葉とし，人が神の理に生きるべきだとする点は共通しているが，規則に拘泥するよりも律法の精神に生きるべきだとしている。たとえばイエスは，当時すでに膨大な戒律を発達させつつあった律法学者やパリサイ人たちに対し「重荷を人の肩に載せ, 自分はそれに指一本さわろうとしない」(マタイによる福音書 23：4）と批判している。しかし，イエスは律法自体を否定したのではなく，その「一点一画もすたれない」(マタイによる福音書 5：18)とも言っている。キリスト教では，人は神の律法を完全に守り切ることができないので，神のゆるしと救いが必要だとし，それを実現するために「救い主」イエス・キリストが神から送られたとする。当然，ユダヤ教徒はイエスを救い主（メシヤ）と受け入れないので，イエスのことを記した新約聖書は「聖書」と認めていない。

しかし，ユダヤ教徒もキリスト教徒も，聖書を神の理を記した啓示であると考える点は共通しているのであり，それぞれの伝統の中で膨大な労力を傾けた聖書研究がなされてきたことは確かである。

3　聖書本文の写本

このような生活すべての基礎となる聖書の本文は，当然非常に重要なものであり，それ自体が神聖

視されてきた。ユダヤ教では，印刷術の発達するはるか前から，それを厳密に写本に書き写していく伝統が発達していた。写字生（ソーフェリーム）は特別な資格を持った者に限定され，厳格な規則に従って書き写され，第三者のチェックがなされてきた。今から二千年も前の死海写本が現在の聖書と驚くほど合致しているのも，このためである。

また，写本の真正性を保つためにマソラと呼ばれる学者集団も形成された。彼らは，聖書各書の文字数を数えることから始まり，様々な異本の校訂作業や読みの統一作業などを行い，聖書本文を確定してきた。このようにして発達した聖書の本文批評学は，現在他のさまざまな書物に対する批評学的研究の基礎となっている。

4　三田メディアセンターのトーラー写本

昨年度，慶應義塾大学三田メディアセンターが入手した資料は，紀元19世紀後半のブハラ（ウズベキスタン）由来のヘブル語聖書トーラーの写本，及びそのケースなど一式である。

ユダヤ人社会は，東ヨーロッパに離散したアシュケナジー系とスペインや西アジアなどアラブ圏を中心に広がったスファラディー系の二つに大分される。本資料は，離散のユダヤ人の学問的中心地であったバビロンの流れを引くスファラディー系中央アジアの写本とケースである。

アシュケナジー系のケースは，豪華に刺繍された布製のケース（マントルと呼ぶ）に入れられ，銀製の王冠や胸当てが添えられるのが一般的である。一方，スファラディー系のものは，打ち出し細工の施された金属で覆われた木製ケースに入られることが多い。本資料のケースも銀メッキされた真鍮製で，その上にトルコ石やルビーなどさまざまな貴石が配され，メノラー（七枝の燭台）やブドウなどの宗教図像がデザインされている。これは，スファラディー系でも，特にブハラ地方に特徴的な装飾として知られており，美術品としての評価も高い。すでにこの地方のユダヤ人共同体は実質的に消失しており，今後この種の資料を入手することは困難になると考えられる。

また，本資料には，ケースの上部につけられるリモニーム（ざくろ）と呼ばれる飾りや写本を読む時に用いられる指示具ヤドも完備している。写本は，鹿皮の羊皮紙に記された上等なものであり，モーセ五書の完品となっている。

このようなトーラー写本は，ユダヤ教やキリスト教，聖書の研究はもとより，書物の歴史や文書批評学を考える上で欠かすことのできないものである。三田メディアセンターが，この度この種の資料を入手することができたことを心から喜びたい。

（請求記号）[140X@48@1]

参考文献

1）R.C. ムーサフ・アンドリーセ著．ユダヤ教聖典入門：トーラーからカバラーまで．市川裕訳．東京，教文館，1990, p. 214.
2）ユダヤ大事典編纂委員会編．ユダヤ大事典．東京，荒地出版社，2006, p. 294.
3）杉本智俊監修．イスラエル国立博物館．東京，朝日新聞出版，2012, p. 32.